

# 英語表現力向上を目指す show and tell の手法を用いた ポートフォリオ活用学習のガイドラインの設計

北 條 礼 子\*・松 崎 邦 守\*\*

(平成17年10月31日受付；平成17年11月30日受理)

## 要 旨

本研究の目的は、英語表現（英作文・スピーチ）力を題材とし、show and tell の手法を用いて、EFL 学習者の自己調節学習者としての態度の養成を目指し、教授ツールとしてのポートフォリオを活用する授業を設計することである。そのため、新潟県内の看護学校1年生36名を対象に、2005年5月に集団調査として事前アンケートを実施した。その結果を参考にポートフォリオを活用する学習活動のガイドラインを作成した。

## KEY WORDS

ポートフォリオ	portfolio	ライティング	writing
スピーチ	speech	ショウ・アンド・テル	show and tell
自己調節学習	self-regulated learning	構成主義	constructivism

## 1. 研究の背景

ポートフォリオは欧米の教育分野において、1980年頃から評価ツール、教授ツールとして用いられるようになった。ポートフォリオはその作成により、学習成果と関連づけて学習の過程を記録できることから、構成主義の学習理論関心のある授業実践者や研究者がポートフォリオに注目するようになったという経緯がある（余田, 2001）。さらに、構成主義学習理論において、自己調節学習者（self-regulated learner）が理想的な学習者であるといわれている。この自己調節学習者とは、効果的な学習方略に関する知識があり、かつどのように、また、その学習方略をいつ用いればよいかを知っている学習者である。自己調節学習者は成績や他者の承認だけではなく、学習そのものに動機づけされ、長期間にわたる課題に最後まで粘り強く取り組んでいける。学習者が効果的な学習方略と動機づけを備え、自分が満足するまで課題に対して粘り強く適応していこうとする持続性を身につけていれば、効果的な学習者になる可能性があり、生涯を通じて学習しようとする動機づけをもつ可能性がある（Slavin, 2002）と言われている。この Slavin (2002) の指摘から、自己調節学習者となるには学習方略を身に付けることが不可欠な要素の一つであることがわかる。さらに、自己調節学習への態度を養成する上で重要な役割を果たす学習方略は教授可能であり、意図的にその使用を繰り返すことにより習慣的で自律的なものになり得る可能性があることと、その際メタ認知の過程が必要となることも指摘され

\* 学習臨床講座

\*\* 千葉県柏市立高柳中学校

ている (McInerney 他, 1977; Oxford & Nyikos, 1989; Cohen, 1998)。

一方国内では、ポートフォリオは総合的な学習の評価手段として注目されていることが多いが、総合的な学習に限定されるものではなく、各教科においても有効な教授ツールあるいは評価ツールであることが指摘されている (村川, 2001)。筆者らは数年来、主に英語学習において教授ツールとしてのポートフォリオの効果について研究を続けてきた。北條・松崎 (2004) において、ポートフォリオを活用した英語表現を扱った学習が自己調節学習 (self-regulated learning) への態度の育成に効果的であることが明らかになっている。しかし、同研究で題材として用いたのは、学習者個々人の看護観に関するスピーチの原稿作成とスピーチの実施であった。同研究はスピーチについては、Brown & Yule (1983) に基づき、スピーチを聴衆とのコミュニケーションの場として捉え、相互作用的なコミュニケーションな課題における学習からのデータを収集する際に必要な5項目を取り入れた。この5項目の内容は以下のとおりである。

- ①目的を持っている。
- ②ある程度の長さがある。
- ③聞き手が話されている内容について理解しようと特に努力しなくてよい程度に構成された内容である。
- ④話す量が管理されている課題である。
- ⑤コミュニケーション上効果的である課題、つまり必要な情報が何点含まれるべきかが決められている課題である。

しかし、同研究に参加した学習者の英語力を考慮するとその内容がかなり困難ではないのかという疑問が生じたことから、本研究ではその扱う内容として新たに show and tell の手法を取り入れてみることにした。show and tell の手法とは、英語を母語とする諸国では、小学校段階から用いられている手法であり、具体物や資料を用いて英語のスピーチを行うものであるが、内容によっては成人を対象にしても扱える手法であることと、その使用範囲の拡張の可能性も指摘されている (<http://www.nikkei4946.com/sb/j%5Findex/contest/>)。

さて、Linn & Gronlund (2000) は、ポートフォリオの価値は、その目的に添うガイドラインに依存するところが大きいことを指摘している。さらに、学習者がポートフォリオ作成の目的を明確に理解しないと、学習者の作成するポートフォリオは雑多ファイルと見分けがつかなくなってしまう可能性があるとの警告を発している。

ガイドラインを明確に述べることの別の理由として、ポートフォリオの弱点への対処があげられる。既述のとおり、ポートフォリオは教授ツールおよび評価ツールとして有効であるといわれている。しかしその反面、ポートフォリオの実践を困難にする弱点も存在しており、Linn & Gronlund (2000) はポートフォリオの弱点について次のように言及している。その弱点とは、①学習者にとって時間や労力がかかる、②教師にとっても時間や労力がかかる、③評定の信頼性が比較的低い傾向にある、④ポートフォリオは容易に作成できるという安易な認識を持たれてしまう傾向がある、という4点である。Linn & Gronlund (2000) は、以上の4つの弱点を克服するための共通の対処法として、ポートフォリオの目的を明確に述べ、さらにポートフォリオ作成のための明確なガイドラインを提示することを提案している。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、英語表現（英作文・スピーチ）学習における show and tell の手法を用いた教授ツールとしてのポートフォリオを活用する授業を設計することである。なお、同授業の設計はポートフォリオのガイドラインを作成することで示す。

## 3. 研究の方法

- 3.1 実施時期：2005年5月  
 3.2 被験者：N県国立看護学校1年生36名  
 3.3 測定具：事前アンケート。その内訳は、フェースシート（ポートフォリオと show and tell に関する二者択一形式3項目と英語、英作文、show and tell に関する内容の5段階尺度形式の5項目）と「英作文」に関する意識についての5段階尺度形式15項目と show and tell についての自由記述である。なお、英作文に関する15項目は Daly 他（1975）が用いた項目を一部修正したものをを用いた。  
 3.4 手続き：集団調査で約15分間で実施した。

## 4. 研究の結果

### 4.1 ポートフォリオ、show and tell について

ポートフォリオ、show and tell に関する3項目について「はい」、「いいえ」の2肢選択形式で看護学生に回答を求めたが、その集計結果と  $\chi^2$  検定の結果は表1に示すとおりである。

表1：ポートフォリオ、show and tell に関する3項目の集計結果と  $\chi^2$  検定結果 (N=36)

項目	項目内容	はい	いいえ	$\chi^2(1)$	p
1	学習結果をファイルにとじ込んだ経験の有無	12	24	4.00	*
2	ポートフォリオという言葉聞いたことがある	2	34	28.44	**
3	英語で show and tell を行った経験の有無	2	34	28.44	**

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

表1から、まず学習結果をファイルに綴じ込んだ経験のある学習者は、その経験のない学習者より5%レベルで有意に多いこと ( $\chi^2(1) = 4.00$ ) がわかった。次に、ポートフォリオという言葉聞いたことがある学習者は1%レベルで有意に少なかった ( $\chi^2(1) = 28.44$ )。また、英語で show and tell を行った経験のある学習者は1%レベルで有意に少なかった ( $\chi^2(1) = 28.44$ )。

## 4.2 英語について

英語, show and tell に関する5項目について「はい」, 「いいえ」の2肢選択形式で看護学生に回答を求めたが, その集計結果と $\chi^2$ 検定結果は表2に示すとおりである。

表2から, 本研究に参加した学習者は英語は好きだが ( $\chi^2(2)=10.67, p<.01$ ), 英作文は得意ではなく ( $\chi^2(2)=10.67, p<.01$ ), show and tell という手法に対して不安感が強いことが見て取れる ( $\chi^2(2)=32.17, p<.01$ )。さらに, 同学習者は, 英語が得意とは必ずしも言えず, 英作文も必ずしも好きではないことがわかる。

表2: 英語, show and tell に関する5項目の集計結果と $\chi^2$ 検定結果 (N=36)

項目	項目内容	肯定	中立	否定	$\chi^2(2)$	p	大小比較
1	英語が得意	6	12	18	6.00	*	肯定=中立<否定
2	英語が好き	20	4	12	10.67	**	肯定>中立<否定
3	英作文が得意	2	4	30	10.67	**	否定>中立<肯定
4	英作文が好き	7	10	19	6.50	*	肯定=中立<否定
5	show and tell が不安	28	5	3	32.17	**	肯定>中立<否定

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$ 

## 4.3 ポートフォリオ活用学習に先立つ英語のライティング不安に関する学習者の意識

## 4.3.1 英語のライティング不安に関する15項目の結果から

英語のライティング不安に関する15項目について平均, 標準偏差を求めたが, その結果は表3に示すとおりである。

表3: 事前アンケートの「英作文」に関する15項目の平均, 標準偏差 (N=36)

項目	項目内容	平均	SD
1	英語で書くのは得意ではない	3.86	1.17
2	私は先生以外の人に自分の英作文を評価されても怖くない	2.25	1.07
3	私はたいていの人と同様に英語で書けるとは思わない	3.89	1.01
4	私は自分の英作文を評価されたくない	3.06	1.07
5	英作文を提出するとき自分がうまくいかないことを知っている	3.72	1.06
6	私は英語で書くことが楽しい	2.67	1.12
7	私は評価されるのであれば, 英作文を書くのが怖い	3.39	1.25
8	英作文を上手に書くのは簡単である	1.39	0.93
9	英作文の授業に行く前に, 英作文がうまくできない気がする	4.17	1.06
10	私は先生に英作文を評価されるのはまったく怖くない	2.36	1.07
11	英作文を書くとき, 考えがまとまらなくて大変な思いをする	3.75	0.94
12	自分の考えを英語で書いて表現するのは時間の無駄だと思う	2.28	0.88
13	私が英語で書いたことを, 他の人が評価してくれる気がする	2.50	0.81
14	自分の英作文について他の人と話し合うのは楽しい経験である	2.72	1.06
15	私は英語で自分の考えをはっきりと書けたことがない	3.50	1.11

表3をみると、まず、項目9の「英作文の授業に行く前に、英作文がうまくできない気がする」の平均が4.17であり、本研究の対象者が英作文を書くことに自信が持てない様子が見て取れる。

さらに、英語のライティング不安を詳しく検討するため分散分析を実施した結果、1%レベルで有意であった ( $F(12,490) = 21.56^{**}$ )。そこでLSD法による多重比較を行ったが、本研究の対象者は、表3の15項目のうち特に項目8の「英作文を上手に書くのは簡単である」とは感じていないことが示された (MSe=1.06, 5%水準)。

#### 4.3.2 自由記述より

事前アンケートでは、ポートフォリオを作成しながら show and tell の手法を用いて英語のスピーチ原稿を書き、最終的に英語でスピーチをするという学習活動についてどのように思うかについて、自由記述による回答を求めた。

まず、スピーチに対して大変不安をおぼえている回答が以下に示すようになりみられた。なお、以下の表現は対象者が書いたままの文章である。

- 原稿を書くのはいいが、スピーチには抵抗がある。いままで、英語を話す機会が少なかったので、上手な発音で話せないで恥ずかしい。(A.Y.)
- 自分は英語が得意ではないし、スピーチというものの経験があまりないので、他の人についていけるか心配です。(E.M.)
- 私は、英文法に対して、まだ分かってないことや、理解しきれてない部分があるので、スピーチなどをするとき、みんなにきちんと内容が伝わるのかが、とても心配です。(I.E.)
- 英語が苦手なので、発音とかもとても下手だし、恥ずかしい。(I.K.)
- いままでに1度もスピーチはしたことがないので、できるか不安です。原稿を書くまでならいいけど、人前で話すのは苦手なので、できるだけやりたくないです。(K.H.)
- 私は英語が苦手、英語で原稿を書き、スピーチすることが本当にできるかととても不安です。(I.Y.)
- 決められた文を読むのはいいけど、自分で書いたものを発表するのは嫌です。英作文を書くのは苦手なので、あまりしたくないのですが、もし書くのであれば、先生だけに見てほしいです。(I.Y.)
- 文法があまりよくわからないので、英作文を書くのは苦手だったし、その上スピーチをするのはけっこう不安です。今まで、英作文を書くことはあっても、英語で原稿なんて書いたことが1度もないので、どんな風に書いたらよいかとかもまったくわからないので、できるのか心配です。(T.M.)
- 私は中学・高校と英語の文法はとても好きでしたが、人前で話すことがとても苦手、まして英語でとなるととても不安です。なのでスピーチは怖い。でも自主的に英語の学習に参加していきたいです。英作文は言いたいことが言えないときもあるから不安。(S.F.)
- 私は、英語があまり得意ではありません。中学の頃から英作が1番苦手、自分が思っている通りに英作を書けたことがありません？。なので、英語で原稿を書いて、スピーチをすることについて、とても不安に思います。(Y.A.)

次に、英語のスピーチ原稿を書き、スピーチをするという学習活動について、不安に思いな

がらも一部前向きな姿勢がみられる回答として以下のようなものがみられた。

- 私は、中・高と英語が苦手だったので、できればスピーチはしたくはないです。もし、するのであっても、原稿を書いた時点で先生にチェックしてもらって、間違いがないかを確かめてもらってからがいいです。(F.M.)
- できれば、スピーチはしたくない。今の能力で、できるはずがない。英会話を習ってる人ぐらいしか無理だ。でも、やってみるのもいいかもしれない。(I.K.)
- 私は、英語で文章を書くのも、沢山の人の前でスピーチすることも苦手です。でも、文章を書くことやスピーチすることは、とても大切だと思っています。だから、すこしでも出来るようにがんばりたいと思います。(I.T.)
- 本当のことを言うと、英語は好きではないです。プリントを渡されて解答するのはいいのですが、人前でスピーチするのは嫌です。黙々と他の人に見られずに学習した方が気が楽になり、集中できます。その方が人に見せるというプレッシャーを受けずにできるからです。でもスピーチは、英語を知る上では大切だと思っています。(I.Y.)
- 英文を書いたり、考えたりするのは楽しそうだと思いますが、多くの人の前で発表するのは少し不安です。私は、すぐ緊張してしまうのでうまく話せない気がします。また文章を考えるうえでうまく表現ができないときなど、少しヒントをもらえたらいいなと思います。(K.K.)
- 私は英語は好きですが、あまり得意ではありません。自分の考えを英語で相手に話すことはなおさら苦手なので、うまくできるかどうか不安ですが、できたらとても楽しいと思います。毎回少しずつでもできるようになるために、前向きに取り組んでいきたいです。(K.Y.)
- 英語ははっきりいってニガテなので、あまり好きではありません。でも、できるだけがんばりたいです。(K.M.)
- 英語で自分の思ったことや考えたことを表現出来たら、とても楽しいと思う。でも実際、自分で英文を書くとなると難しいし、大変なんだろうなあと思うとかなり不安になる。まあ、自分なりに考えてきた英文をみんなの前でスピーチするのではなく、先生に提出して評価してもらっただけならそっちの方が全然良いし、やる気もおきる。自分の言いたいことを英語で伝えられるようになるのには憧れるけど、そこまでいくのは…苦悩の道でしょうね。でも頑張ってみたいです。(S.T.)
- 英作文を書くことが苦手ですごく不安ですが、やったらすごくいい経験になると思うし何といっても英語の能力を向上させることができる、と思うので積極的に取り組むことはよいことだと思います。(Y.K.)

最後に、英語のスピーチに関して不安があっても、かなり肯定的にとらえている回答も2例みられたが、以下のとおりである。

- 中学生の時からとても興味があり、1度はやってみたいと思っていました。ですが、英語である程度長い文を発表することは大変難しいことであり、聞き手に理解してもらうことはなおさら難しいと思います。聞き手に自分の発表を理解してもらうためには、あらかじめ発表原稿の配布や予習をしてきてもらう必要があると私は思います。また、そのようにして授業が進められていくのであれば、私は仲間の原稿を読むことが楽しみで、学習もよ

り楽しめるのではないかと思います。私は文章を作ることは何とかできますが、スピーチをすることには不安があります。発音が上手くできなくて、聞き手に伝わらないのではないかと、不安に思います。そのためにも、前もって原稿を配布しておくことは意味のあることだと思います。最後に一言、楽しみです。(O.E.)

- 楽しいことだと思う。英語を勉強することは、とても楽しいので、英語の授業がわくわくします。また、できれば1年後くらいに短期留学をしたいと考えているので、スピーチすることによって、きれいな発音を学べたらいいなと思います。今はまだ、参考書や辞書などで、文を調べてではないと原稿は書けないと思うが、少しずつでも毎日勉強をして、何も見なくても原稿が書けるようになりたい。そして、先生と一対一で、普通に英会話ができるようになることを目標に頑張ります。"show and tell" 楽しみです!! 一生懸命頑張ります。(K.K.)

## 5. ガイドラインの設計

### 5.1 ガイドラインの設計にあたって

事前アンケートの結果から、本研究に参加した学生は英語は好きだが英作文は苦手であると捉え、show and tell 活動を行うことには不安が強いことがわかった。また同学生は特に授業で英作文がうまくできない気がしていることが明らかになった。さらに自由記述からも、英作文を書くことばかりでなく授業の最後にクラスメートの前で英語のスピーチを行うことに強い不安をおぼえている学生が多くいることがみてとれた。

以上から、英作文を書く際に、学生の不安感が軽減されかつ学生の動機づけをそがないように、なるべく教員が英文をチェックすることとし、その際全面的に書き直すことはせず、最低限の修正を加えることとした。なお、スピーチ原稿の修正については肥沼のホームページに記載されている留意点を参考とした。のまた、英文を書く際に参考になるように学生が話したいテーマを調査し、できるだけ多くの例文を示すことにした。

### 5.2 ポートフォリオ作成に関する学習目標

本研究のポートフォリオ活用学習において、期待される学習成果は以下のとおりである。

#### a. 自律的学習能力を高める。

- ①単元(ユニット)の大まかな学習計画を立てることができる。
- ②ガイドラインに基づいて学習経過を集積できる。
- ③自分の学習について振り返りを行うことができる。
- ④自分の学習について自己評価することができる。
- ⑤自分の学習について仲間や先生とコミュニケーションできる。
- ⑥自分の学習をよりよく修正できる。

#### b. 英語で show and tell を行う力を身につける。

- ①英語を書いて表現することに意欲的に取り組むことができる。
- ②学習した英語を積極的に活用し、英語を書いて表現することができる。
- ③ライティング方略を積極的に活用することができる。
- ④スピーチ方略を積極的に活用することができる。

- ⑤メタ認知方略を積極的に活用することができる。  
 ⑥ show and tell の一般的な形式にそって、英語で原稿を書くことができる。  
 ⑦ show and tell の一般的な形式にそって、英語でスピーチができる。

### 5.3 エントリーについて

エントリーというのは、ポートフォリオに収めるもののことであるが、本研究では、ポートフォリオを目的にあわせて資料を収集するワーキング・ポートフォリオとその中のベストのものを自ら選択するショーケース・ポートフォリオの2種類のポートフォリオを活用することとした。

#### 5.3.1 ワーキング・ポートフォリオ

内 容	収 集 の 時 期
①「show and tell の原稿（番外）を書こう」 …評価対象にはしません	・第1回目の授業
②ガイドライン	・授業で提示
③ゴールカード （各ユニットの学習計画や学習に対する自己評価）	・毎授業終了時
④授業で配布されたプリント （ファイルするよう指示があったもの）	・授業で指示 （指示は配布前に必ずします）
⑤カンファレンス・シート及び リフレクションシート	・カンファレンス終了時
⑥「show and tell アイディア・カード」	・授業で指示
⑦「show and tell 原稿」	・授業で指示
⑧学び愛カード	・他の人のポートフォリオを見たとき ・カンファレンスで仲間の発表を聞いたとき
⑨その他（自分が特に必要であると判断したもの）	・随時（判断した理由を示すこと）
⑩ショート・クイズ（小テスト）	・採点、返却された後

#### 5.3.2 ショーケース・ポートフォリオ

- ①エントリーのリスト  
 ②「ユニット1からユニット3までのゴールカード」の中から自律的学習者としての成長を最も良く表していると自分が考えるもの1枚  
 ③「カンファレンス1・2・3」のカンファレンスシート、リフレクションシートの中から、自律的学習者としての成長を最も良く表していると自分が考えるもの1枚  
 ④「show and tell アイディア・カード」「show and tell の原稿②～」の中で、英語の表現力の伸びを最も良く表していると自分が考えるもの各1枚  
 ⑤7/11（月）実施の「show and tell の原稿（3つのうち好きなもの）」（英作文テスト）  
 ⑥上記②・③・④に対するカバー・シート  
 → ②・③・④が選ばれた理由等が簡潔に記述されたもの  
 ⑦選択英語の1学期の学習に関する全般的な自己評価票

#### 5.4 カンファレンスについて

本研究では、ポートフォリオ作成に関し3種類のカンファレンスを行うこととした。

①個人カンファレンス	… 授業中・授業外で希望者のみに実施
②グループカンファレンス	… 授業中に全員参加で実施
③全体カンファレンス	… 授業中に全員参加で実施

#### 5.5 振り返りについて

本研究では学習に対する「振り返り」を重要視し、以下のものを活用して学習活動に対する振り返りを行うことを学習者に示すことにした。

①ゴール・カード
②カンファレンス
③ショーケース・ポートフォリオに含めるエントリーの選択
④ショーケース・ポートフォリオに関するカバー・レター

#### 5.6 シラバス

本研究のポートフォリオ活用学習を「英語のスピーチにチャレンジ!」と題し、以下のような5部から成る学習計画を立て、同学習開始時に学習者に提示することにした。

##### <事前準備>

期 日	学 習 活 動 の 内 容
① 4 / 25 (月) (13:00~14:30)	・英語力試験
② 5 / 9 (月) (13:00~14:30)	・ガイドライン作成のためのアンケート調査① ・show and tell のテーマについて ・英作文テスト (show and tell (番外) の原稿を書こう!)

##### <ユニット1>

③ 5 / 16 (月) (13:00~14:30)	・アンケート調査の結果報告 ・ポートフォリオの説明 [ポートフォリオとは] [ガイドラインの提示] ・メタ認知方略について ・メタ認知方略を意識しながらユニット1の学習計画をゴールカード①に記入しよう! ・班決め ・short quiz (小テスト) ①
④ 5 / 23 (月) (13:00~14:30)	・ライティング方略について ・show and tell のアイデア・カード①を書こう!

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ show and tell の Useful Expressions ①</li> <li>・ show and tell の原稿①を書こう！ (下書き)</li> <li>・ short quiz (小テスト) ②</li> </ul>
⑤ 5 / 30 (月) (13:00~14:30)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ スピーチ方略について</li> <li>・ show and tell の原稿①を完成させよう！</li> <li>・ short quiz (小テスト) ③</li> </ul>

＜ユニット 2＞

⑥ 6 / 6 (月) (13:00~14:30)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ show and tell の原稿①の発音練習</li> </ul>
⑦ 6 / 13 (月) (10:30~12:00)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ show and tell の発表会①</li> <li>・ 学び愛カードの記述</li> <li>・ 第1回カンファレンス (グループ) のガイドラインの提示及び説明</li> <li>・ 第1回カンファレンス・シートを完成させよう！</li> </ul>
⑧ 6 / 20 (月) (10:30~12:00)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第1回カンファレンス (グループ内)</li> <li>・ 学び愛カードの記述</li> <li>・ 第1回カンファレンス (グループ) の振り返り</li> </ul>
⑨ 6 / 20 (月) (13:00~14:30)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ show and tell のアイデア・カード②を書こう！</li> <li>・ show and tell の Useful Expressions ②</li> <li>・ show and tell の原稿②を書こう！ (下書き)</li> </ul>

＜ユニット 3＞

⑩ 6 / 27 (月) (10:30~12:00)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ show and tell の原稿②を完成させよう！</li> </ul>
⑪ 6 / 27 (月) (13:00~14:30)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ show and tell の原稿②の発表練習 (グループごと)</li> </ul>
⑫ 7 / 4 (月) (10:30~12:00)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ show and tell の発表会②</li> <li>・ 学び愛カードの記述</li> <li>・ 第2回カンファレンス (全体) のガイドラインの提示及び説明</li> <li>・ 第2回カンファレンス (全体) の準備・練習</li> </ul>
⑬ 7 / 4 (月) (13:00~14:30)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第2回カンファレンス (全体) … 発表会</li> <li>・ 学び愛カードの記述</li> <li>・ 第2回カンファレンス (全体) の振り返り</li> <li>・ ショーケース・ポートフォリオのガイドラインの提示および説明</li> <li>・ 各エントリーに関するカバーシート作成について</li> </ul>

## 〈まとめ〉

⑭ 7 / 11 (月) (10:30~12:00)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英作文テスト (show and tell の原稿を書こう！)</li> <li>・事後アンケート</li> <li>・各エントリーに関するカバーシート作成</li> <li>・ショーケース・ポートフォリオの作成</li> </ul>
⑮ 7 / 11 (月) (13:00~14:30)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語力テスト</li> <li>・ショーケース・ポートフォリオとワーキング・ポートフォリオの提出</li> </ul>

## 6. 今後の予定

本研究は教授ツールとしてのポートフォリオを活用し、EFL 学習者の自己調節学習者としての態度の養成を目指している。その目的を達成するために本研究では英語の活動の手段として show and tell の手法を用いることにした。ポートフォリオ活用学習のためのガイドライン作成のために必要な情報を得るため、同学習開始以前に看護学生を対象に事前アンケート実施した。その結果は上記に示したとおりであり、そこから得られた結果に基づいて作成したガイドラインを示した。

今後、このガイドラインに沿って実施したポートフォリオを活用した学習の結果について報告する予定である。

## 引用・参考文献

- Benson, P., & Voller, P. 1997. *Autonomy & independence in language learning*. Longman.
- Cohen, A.D. 1994. *Assessing language ability in the classroom*. (2nd ed.) Heinle and Heinle.
- \_\_\_\_\_. 1998. *Strategies in learning and using a second language*. Addison Wesley Longman.
- Daly, J.A., & Miller, M.D. 1975. The empirical development of an instrument of writing apprehension. *Research in the Teaching of English*, 9, 242-249.
- Delett, J. S., Barnhardt, S., & Kevorkian, J.A. (2001). A framework for portfolio assessment in the foreign language classroom. *FOREIGN LANGUAGE ANNALS*. 34, 6, 559-568.
- Dickinson, L. 1987. *Self-instruction in language learning*. Cambridge University Press.
- Ferris, D., & Hedgcock, J.S. 1998. *Teaching ESL composition-purpose, process, and practice*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Genesee, F., & Upshur, J.A. 1996. Portfolio and conference. In *Classroom-based evaluation in second language education* (98-117). Cambridge University Press.
- Grabe, W., & Kaplan, R.B. 1996. Responding to writing and writing assessment. *Theory and practice of writing*. (337-421). Addison Wesley Longman.
- Hojo, R., & Matsuzaki, K. 北條礼子・松崎邦守. 2004. 「自己調節学習者育成を目的とする教授ツールとしてのポートフォリオを活用した事例研究 — 日本人看護学生を対象とした

- 英語表現（英作文・スピーチ）学習において ― 2004年日本教育工学会第20回全国大会講演論文集 267～268頁
- Klenowski, V. 2002. *Developing portfolios for learning and assessment*. Routledge Falmer.
- Koinuma, N. 肥沼則明. 「Show and Tell を行おう！」 (<http://homepage3.nifty.com/koinuma/S&T.htm>).
- LeMahieu, P.G., Gitomer, D.H., & Eresh, J.T. 1995. Portfolios in large-scale assessment: Difficult but not impossible. *Educational measurement: Issues and practice*, Fall, 11-28.
- Linn, R.L., & Gronlund, N.E. 2000. *Measurement and assessment in teaching (Eighth Ed.)*. Prentice-Hall.
- Matsuzaki, K. 松崎邦守. 2002. 「外国語（英語）のライティング学習におけるポートフォリオの活用」日本学校教育学会第17回研究大会発表要旨集 76-77.
- Paulson, F.L., Paulson, P.R., & Meyer, C.A. 1991. What makes a portfolio a port-folio? *Educational Leadership*, 48, February, 60-63.
- Pemberton, R., Li, E.S.L., Or, W.W.F., & Person, H.D. (eds.) 1996. *Taking control - Autonomy in language learning*. Hong Kong University Press.
- Sato, M. 佐藤学. 1998. 「教育改革をデザインする」 岩波書店.
- Slavin, R.E. 2002. *Educational psychology: theory and practice (7th ed.)*. Allyn and Bacon.
- Yoden, Y. 余田義彦（編）. 2001. 「生きる力を育てるデジタルポートフォリオ学習と評価」 高陵社書店.

## Designing Guidelines for Portfolios Used in EFL Writing and Speech Classes Utilizing Show and Tell Method

HOJO Reiko\* and MATSUZAKI Kunimori\*\*

### ABSTRACT

Guidelines including clear purposes for making portfolios are one of the most essential factors to create effective portfolios. The purpose of this study is to write the guidelines for a learning program utilizing portfolios as an instructional tool in order to nurture self-regulated learners in EFL classes. The program adopted the show and tell method for the participants to give speeches in English in class as a final goal. In order to obtain necessary information to design the guidelines for portfolios, questionnaires were administered in May of 2005 to 36 nursing students before creating portfolios. Based on the results of the questionnaires, the guidelines are shown.

---

\* Division of Learning Support

\*\* Takayanagi Junior High School, Kashiwa, Chiba